

# 令和5年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」

調査研究テーマC

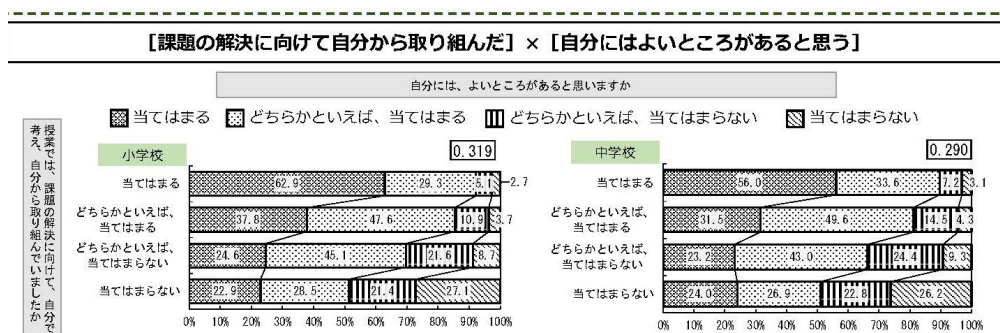
「令和5年度全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙調査（うち、挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等）の結果を活用した専門的な分析」

2024年3月

# 本調査研究の目的

## ■ 文部科学省・国立教育政策研究所「令和5年度全国学力・学習状況調査の結果」

([https://www.nier.go.jp/23chousakekkahoukoku/report/data/23summary\\_zentai.pdf](https://www.nier.go.jp/23chousakekkahoukoku/report/data/23summary_zentai.pdf)) にあるとおり、調査結果から、主体的・対話的で深い学び（主・対・深）に関する設問と児童生徒の自己有用感等に関する設問との間には相関が見られることが明らかになった



(出典) 文部科学省・国立教育政策研究所「令和5年度全国学力・学習状況調査の結果」

## ■ また、総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科道徳（総合・学活・道徳）に関する設問と児童生徒の自己有用感等に関する設問の間にも相関が見られた

## ■ このことについてより詳細に分析するため、本委託調査では令和4年度および令和5年度の「全国学力・学習状況調査」の児童生徒質問紙を用いて、児童生徒の「主・対・深」や「総合・学活・道徳」の取組状況に関する質問項目（カテゴリ7・8）と児童生徒の「自己有用感等」に関する質問項目（カテゴリ2）との関係性をより詳細に分析する

1. 個別カテゴリ間の相関関係を確認し、質問カテゴリ別の関係性の違いを考察する
2. 質問カテゴリ2と質問カテゴリ7・8のそれぞれについて因子分析を行い、質問項目の分類を行ったうえで相関を確認する
3. 学力や社会経済的背景（SES）が、児童生徒の取組状況と児童生徒の自己有用感等の双方に影響を与えることによる「交絡」によってバイアスが生じる可能性を考慮して、学力やSESの影響を統計的にコントロールした分析を行う
4. 令和4年度と令和5年度で児童生徒の取組状況が進展した学校とそうでない学校の自己有用感等の伸びを比較することで、学校固有の時間を通じて変化しない要因（教育熱心さ等）の影響を排除した分析を行う

※なお、本概要版では主に小学校の分析結果を紹介するが、中学校についてもほとんど同様の結果が得られている

# 分析結果のまとめ

---

1. 小学校・中学校ともに、児童生徒の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況と「自己有用感等」の間には正の相関が見られる
  - 「自己有用感等」のうち、特に質問13「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思う」や質問8「人が困っているときは、進んで助けている」は相対的に高い相関が見られる
  - ただし、「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況ごとの相関係数の違いは大きくなく、「主・対・深」「総合・学活・道徳」の質問項目間の類似性が高いことが影響している可能性がある
2. 小学校、中学校ともに、児童生徒の「主・対・深」「総合・学活・道徳」に関係する取り組みはSES・学力の高低に関わらず、いずれの層の「自己有用感等」にも一定程度有効な可能性がある。また、SESや学力による交絡は深刻なバイアスに繋がっていない
3. 令和4年度と令和5年度の比較では、児童生徒の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況の変化に応じて「自己有用感等」も変化した可能性が考えられる

## 【解釈の留意点】

- なお、これらの分析結果は、児童生徒の「自己有用感等」の回答と児童生徒の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況の回答との間の相関関係を多面的に検証した結果である
- いずれの分析においても、以下のような観測不可能な要因の影響を取り除くことはできていないという点には留意が必要である
  - 児童生徒固有の性向（全体的に高め回答する児童生徒と全体的に低めに回答する児童生徒がいる可能性）
  - 教員の指導状況（児童生徒の「自己有用感等」と児童生徒の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況の回答をどちらも高めるような指導を行う教員がいる可能性）

# 1. 児童の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況と「自己有用感等」との関係性の分析

## 児童の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況と「自己有用感等」との相関（事前調査分）

**ポイント：児童の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況と「自己有用感等」の間の相関関係は、他の児童生徒質問紙調査の質問項目同士の相関関係に比べて高い**

令和5年度「全国学力・学習状況調査」の児童生徒質問紙調査で質問した項目同士の相関を確認したところ、以下のカテゴリ間において、他の組合せに比べて高い相関があることが明らかになった

カテゴリ2：挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等（自己有用感等）

カテゴリ7：主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況（主・対・深）

カテゴリ8：総合的な学習の時間、学級活動（※）、特別の教科道徳（総合・学活・道徳）

（※）特別活動を構成する学級活動

### 【文部科学省 提供情報】

児童質問紙調査の全ての質問項目同士、生徒質問紙調査の全ての質問項目同士の相関係数を確認したところ、以下のとおりであった

（小）児童質問紙調査 0.2未満：57.7% 0.2以上：42.3%（うち0.3以上：16.0%）

（中）生徒質問紙調査 0.2未満：66.6% 0.2以上：33.4%（うち0.3以上：10.9%）

しかし、次のカテゴリの項目同士の相関係数は、70%以上の組合せで0.2以上となり、0.3以上となった組合せも約15～25%見られた

#### 【カテゴリ2「自己有用感等」×カテゴリ7「主・対・深」の質問項目同士（12項目×7項目）の相関係数】

（小）児童質問紙調査 0.2未満：25.0% 0.2以上：75.0%（うち0.3以上：25.0%）

（中）生徒質問紙調査 0.2未満：27.4% 0.2以上：72.6%（うち0.3以上：19.0%）

#### 【カテゴリ2「自己有用感等」×カテゴリ8「総合・学活・道徳」の質問項目同士（12項目×4項目）の相関係数】

（小）児童質問紙調査 0.2未満：22.9% 0.2以上：77.1%（うち0.3以上：14.6%）

（中）生徒質問紙調査 0.2未満：18.8% 0.2以上：81.2%（うち0.3以上：25.0%）

# 1. 児童の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況と「自己有用感等」との関係性の分析

## 児童の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況と「自己有用感等」との相関（R5小学校）

**ポイント：児童の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況と「自己有用感等」(特に「人が困っているとき進んで助けている」「自分と違う意見について考えるのは楽しい」)の間には正の相関が見られる**

- 児童の取組状況と自己有用感等との相関を確認すると、カテゴリ2「自己有用感等」の質問項目ごとに傾向の違いが確認される
  - カテゴリ7「主・対・深」やカテゴリ8「総合・学活・道徳」は、質問項目全般において、質問8「人が困っているとき進んで助けている」や質問13「自分と違う意見について考えるのは楽しい」の間の正の相関が相対的に高い傾向がある
  - 質問7「将来の夢や目標を持っている」や質問9「いじめはいけななことだと思う」などとの相関は低い傾向がある（ただし、例えば質問9は小中とも80%以上が「当てはまる」と回答しているなど回答の分散が小さい（回答のばらつきが少ない）点に留意が必要）
  - 質問12「学校に行くのが楽しい」についても、一定の相関が確認される
- 一方で、カテゴリ7・8の質問項目のなかで、特定の質問項目が児童の自己有用感等と強い相関があるような関係は見られない
  - 質問32「授業で工夫して発表していた」は相対的にカテゴリ2の質問項目との相関がやや低い傾向がある

		カテゴリ2（挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等）											回答の平均	回答の分散	
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14			15
カテゴリ7	32	0.277	0.217	0.149	0.161	0.269	0.080	0.199	0.217	0.204	0.339	0.098	0.174	2.81	0.87
	33	0.319	0.284	0.238	0.184	0.345	0.169	0.255	0.312	0.294	0.429	0.156	0.229	3.06	0.62
	34	0.294	0.274	0.231	0.180	0.326	0.160	0.248	0.294	0.275	0.414	0.147	0.221	2.98	0.68
	35	0.268	0.332	0.337	0.148	0.262	0.213	0.282	0.291	0.353	0.358	0.223	0.272	3.16	0.63
	36	0.320	0.291	0.241	0.179	0.334	0.159	0.282	0.299	0.327	0.402	0.268	0.293	3.18	0.63
	37	0.293	0.283	0.273	0.174	0.322	0.186	0.276	0.304	0.299	0.413	0.173	0.239	3.04	0.66
	38	0.287	0.269	0.242	0.171	0.311	0.170	0.245	0.304	0.284	0.391	0.161	0.224	3.17	0.66
カテゴリ8	39	0.280	0.259	0.203	0.177	0.292	0.142	0.226	0.264	0.252	0.360	0.132	0.203	3.02	0.72
	40	0.230	0.287	0.266	0.140	0.269	0.163	0.229	0.249	0.258	0.315	0.172	0.216	3.04	0.70
	41	0.282	0.285	0.255	0.210	0.361	0.193	0.263	0.318	0.290	0.378	0.177	0.236	3.01	0.70
	42	0.270	0.285	0.254	0.178	0.323	0.191	0.241	0.297	0.283	0.347	0.177	0.239	3.24	0.66
回答の平均		3.21	3.37	3.52	3.34	3.36	3.79	2.92	3.70	3.31	3.04	3.51	3.40		
回答の分散		0.70	0.53	0.45	0.92	0.45	0.26	0.95	0.34	0.69	0.71	0.54	0.46		

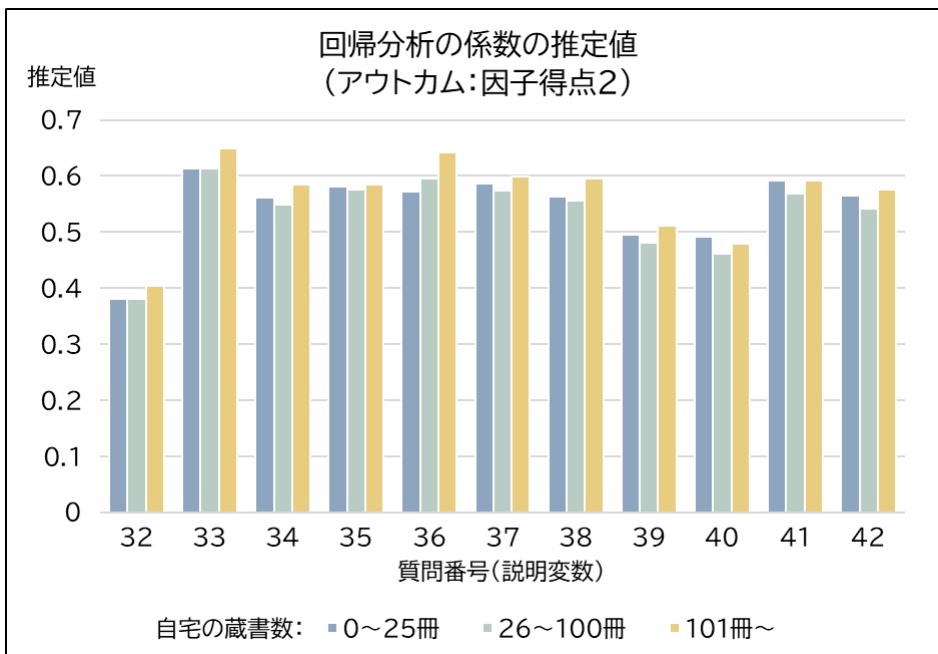
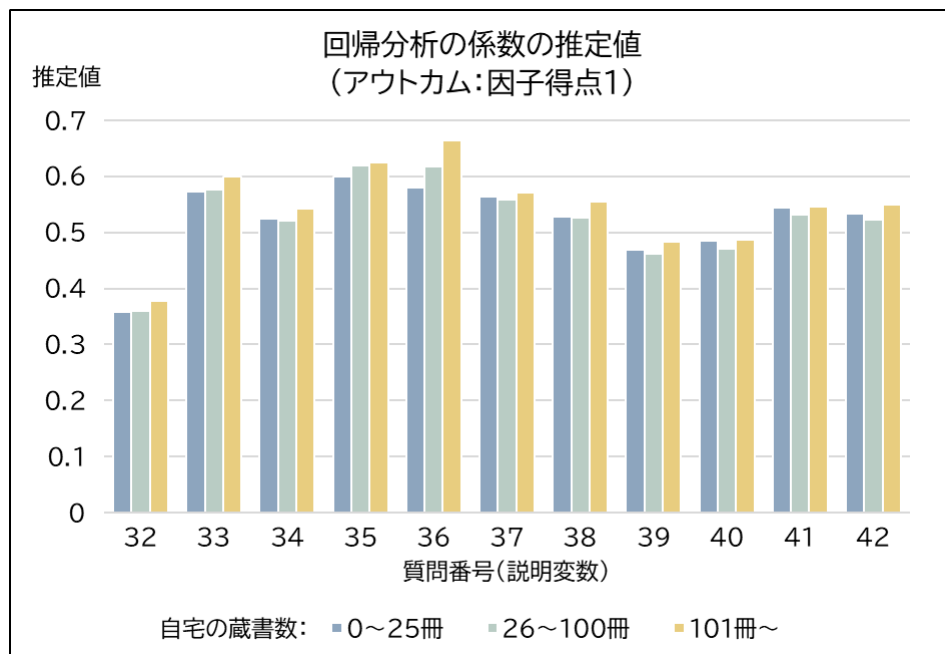
## 2. SESや学力を統制した分析

### SESによる層別の回帰分析（R5小学校）

**ポイント：SES（自宅の蔵書数）の水準に関わらず、「主・対・深」や「総合・学活・道徳」は有効な可能性**

- SES（自宅の蔵書数）の水準でサンプルを分割したうえで、回帰分析を実施した
  - 都道府県・地域規模・学校の学級数規模・性別をコントロールしている
  - 棒グラフはカテゴリ7・8の質問回答の係数の推定値を表す
  - 例えば質問32への回答が4件法で1向上すると、因子得点1のスコアが0.3～0.4標準偏差程度上昇することがわかる
- 自宅の蔵書数による推定値の多少の変動はみられるものの、基本的にどの層に対しても推定値は比較的高い値を示している
  - 「主・対・深」や「総合・学活・道徳」は、児童のSESの水準に関わらず比較的有效である可能性が示唆される
  - サンプルサイズが非常に大きいため推定結果はいずれも統計的に有意である（※）

因子得点1・因子得点2については、スライド9を参照



※いずれもp値=0となっている



## 2. SESや学力を統制した分析

### 学力による層別の回帰分析（R5小学校）

#### ポイント：学力の水準に関わらず、「主・対・深」や「総合・学活・道徳」は有効な可能性

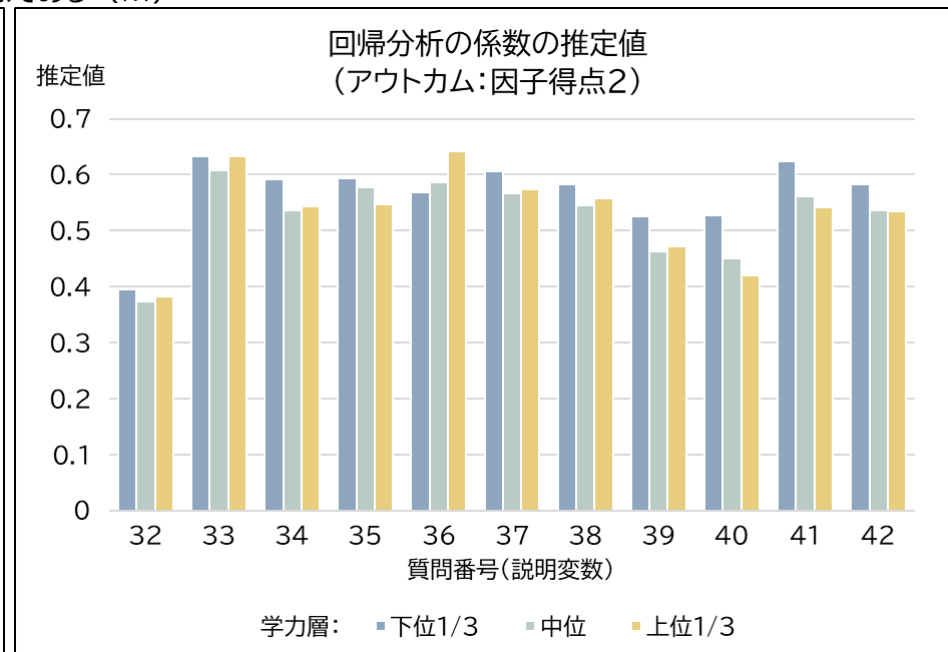
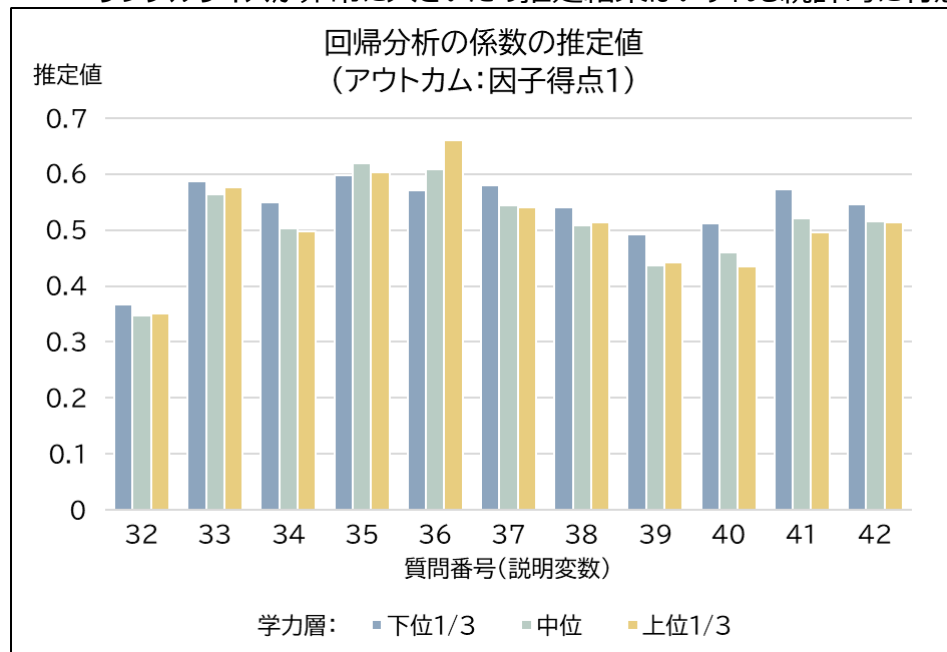
■ 学力の水準でサンプルを分割したうえで、回帰分析を実施した

- 都道府県・地域規模・学校の学級数規模・性別をコントロールしている
- 棒グラフはカテゴリ7・8の質問回答の係数の推定値を表す
- 例えば質問32への回答が4件法で1向上すると、因子得点1のスコアが0.3～0.4標準偏差程度上昇することがわかる

因子得点1・因子得点2については、スライド9を参照

■ 基本的には、どの層に対しても推定値は比較的高い値を示している

- カテゴリ8の質問（質問39～質問42）については、低学力層の方が係数がわずかに大きい傾向にあり、「総合・学活・道徳」が低学力層に対して比較的有效である可能性が示唆される
- 逆に、質問36「話し合いにより考えを深め広げた」については、高学力層の方が係数がわずかに大きい傾向にある
- サンプルサイズが非常に大きいため推定結果はいずれも統計的に有意である（※）

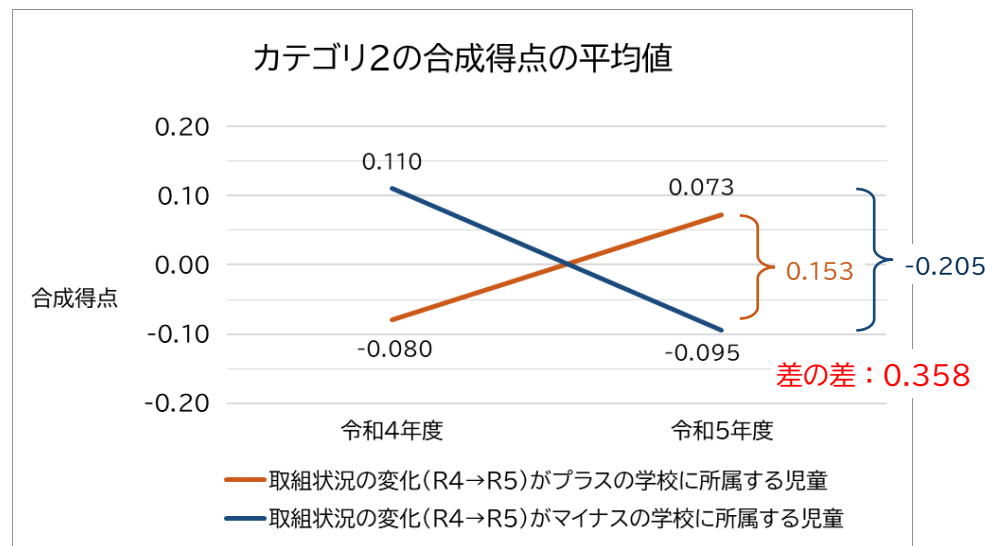
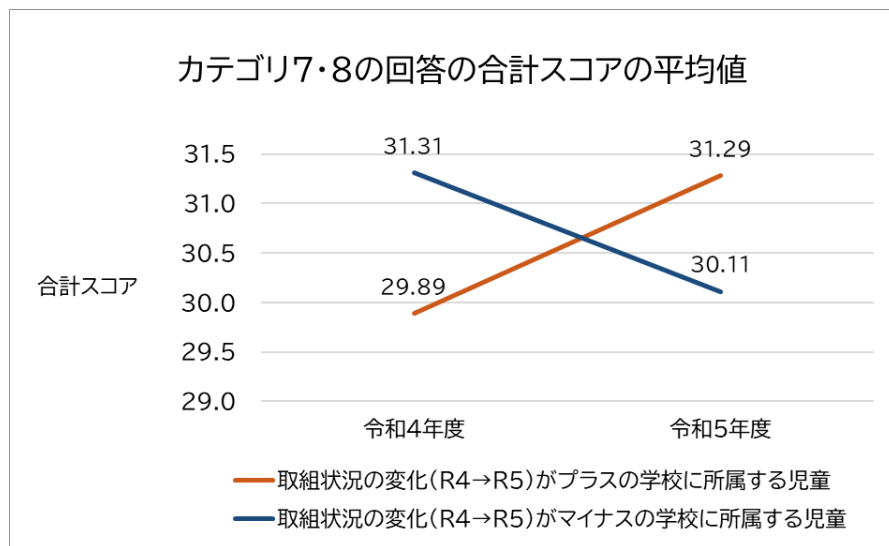


※いずれもp値≒0となっている

### 3. R4とR5の児童の取組状況の変化による分析（小学校）

**ポイント：R4とR5の児童の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況の変化に応じて「自己有用感等」も変化した可能性**

- 左下図は、カテゴリ7・8の合計スコアのR4からR5への変化によって学校をグループ分けし、グループごとの児童単位の平均値を図示したものである
  - プラスの変化があった学校はマイナスの変化があった学校に比べてR4時点のスコアが低く、R5時点ではそれが逆転していることがわかる
  - ただし、このような変化がみられる背景には、以下のような理由も考えられることに留意が必要
    - 取組状況が改善する余地のある学校はもとの取組状況のスコアが低い学校であり（逆も同様）、平均に回帰した可能性（有識者委員からも指摘あり）
    - 令和4年度の小学6年生と令和5年度の小学6年生の間でランダムな変動が発生した可能性
- 右下図は、プラスの変化があった学校とマイナスの変化があった学校のそれぞれについてカテゴリ2の合成得点の児童単位の平均値を算出し、その変化量の差を図示したものである
  - プラスの学校はマイナスの学校に比べて、カテゴリ2の合成得点が0.36標準偏差分だけ増加している
  - カテゴリ7・8の回答とカテゴリ2の回答の相関が反映され、左下図と同様の変化となっていることがわかる





## 参考：主な利用変数の一覧（令和5年度児童質問紙 ※小学生）

カテゴリ番号	カテゴリ	質問番号	質問
2	挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等	4	自分には、よいところがあると思いますか
		5	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか
		6	先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか
		7	将来の夢や目標を持っていますか
		8	人が困っているときは、進んで助けていますか
		9	いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか
		10	困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか
		11	人の役に立つ人間になりたいと思いますか
		12	学校に行くのは楽しいと思いますか
		13	自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか
		14	友達関係に満足していますか
		15	普通の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか
7	主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況	32	5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか
		33	5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか
		34	5年生までに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか
		35	5年生までに受けた授業は、自分にあつた教え方、教材、学習時間などになっていましたか
		36	学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか
		37	学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか
		38	授業で学んだことを、ほかの学習で生かしていますか
8	総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科道徳の取組状況	39	総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか
		40	あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか
		41	学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいますか
		42	道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか

# 参考：児童の「自己有用感等」に関する質問項目の分類（R5小学校）

- カテゴリ2の質問への回答結果に対して因子分析を用いて、質問項目を分類した（プロマックス回転・最尤法）
  - 因子数を3以上とすると適切に計算できない不適解が生じるため、因子数は2と設定した
    - 本来の因子数（観測不可能）に比べて、3因子以上だと因子数が多すぎる可能性がある
- 左表は因子負荷量を表している
  - 因子1は、質問5「先生がよいところを認めてくれる」、質問10「先生や学校にいる大人に困りごとなどを相談できる」、質問15「普段の生活の中で幸せな気持ちになることがある」等の質問項目に関係する因子である
  - 因子2は、質問8「人が困っているとき進んで助けている」や質問11「人の役に立つ人間になりたい」等の質問項目に関係する因子である
- 右表は因子得点とカテゴリ7・8の各質問項目との相関係数を表している（色付けでは違いが分かりづらいため棒グラフで表している）
  - 因子得点1と因子得点2で、カテゴリ7「主・対・深」やカテゴリ8「総合・学活・道徳」との相関の傾向に大きな違いは見られない

因子負荷量行列

質問番号	因子1	因子2
4	0.539	0.056
5	0.578	0.028
6	0.407	0.092
7	0.100	0.275
8	0.003	0.579
9	0.007	0.415
10	0.530	0.014
11	-0.065	0.709
12	0.570	0.059
13	0.292	0.284
14	0.602	-0.143
15	0.630	-0.056
寄与率	0.188	0.101

※値が0.3以上の場合に  
黒字で表示している

※因子間相関：0.714

因子得点とカテゴリ7・8との相関係数

	因子得点1	因子得点2	
カテゴリ7	32	0.345	0.365
	33	0.455	0.488
	34	0.433	0.464
	35	0.490	0.466
	36	0.499	0.487
	37	0.460	0.480
	38	0.433	0.461
カテゴリ8	39	0.396	0.419
	40	0.403	0.403
	41	0.454	0.492
	42	0.436	0.460